高度技能に基づいた伝統工芸サブブランドに関する試験・研究開発（第 4 報）

― 古津軽塗模様のデータベースの構築とベクターデータ化 ―

Study on sub-brand development based on the traditional craftsmanship (4th report)

- Building a database of old Tsugaru-nuri patterns and vectorizing the data. -

小松　勇、鳴海　藍

近年の津軽塗製品では、唐塗の斑点やななこ塗の輪紋などの不定形でランダムに配置された「模様」による表現が多く用いられる傾向にあり、意匠性の高いモチーフやこれが規則的に配置された「文様」による表現は減少している。一方、サブブランド商品の開発においてはテーマ性を持つ文様入りアイテムの創出も想定している。そこで、弘前市立博物館が所蔵する「津軽漆塗手板（県重宝第 157 号）」を対象に過去の津軽塗製品について調査し、模様データベースの構築に取り組んだ。

調査対象とした「津軽漆塗手板」は、江戸後期から明治前期にかけて受注生産のために制作された 514 枚の塗見本手板で、現在ではあまり見られない模様、特に吉祥文様や津軽藩を示す家紋が散見される。

模様データベース構築にあたっては、Microsoft Excel で整理表（図1）を作成し、弘前市教育委員会提供の県指定文化財申請書の写しと添付写真を基に、手板毎に、塗り名称、寸法、写真のスキャン画像を整理し、文様の有無を調査して記載した。本データベースは古い津軽塗作品の制作年代を想定することで付加価値向上への活用や将来の開発研究を見据えたものである。

次に、Adobe 社の Illustrator を用いて、写真の文様をペンツールでトレースしてベクター化を進め、今年度は 10 種の文様のデータを作成した（図2）。ベクターデータは、「拡大縮小による画質劣化がない、低容量で保存できる、シルクスクリーン製版や三次元曲面転写に応用しやすい、PC 上で商品企画のシミュレーションがしやすい」などの利点があり、サブブランド製品の開発に有用である。また、作業過程の調査で得られた「文様の意匠と吉祥の意味」等の知見を備考欄に記した。

今後も作業を進め、次年度実施するサブブランド試作開発に応用する。模様データベースがある程度できた段階で、日本工芸史を専門とする第三者の評価を得る予定である。

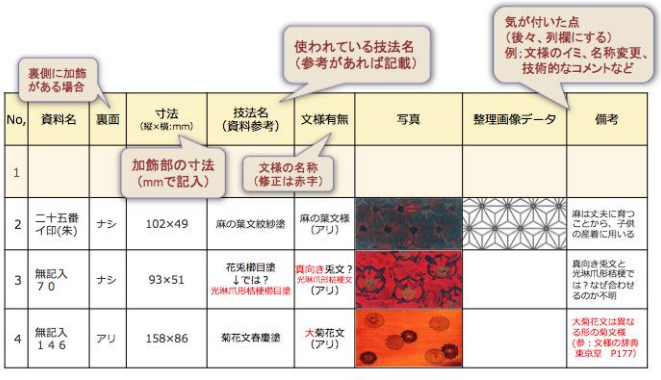


図１　古津軽塗の模様データベース

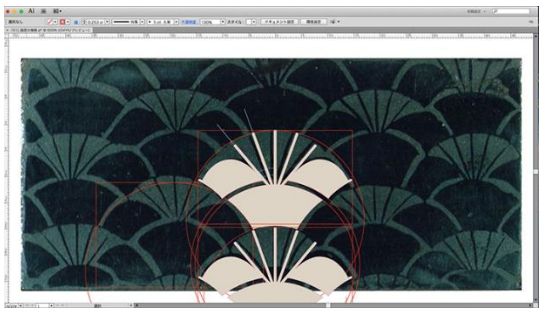


図２　文様のベクター作業